

中国土木水利工程学会 (CICHE)

年次大会参加報告

フェロー会員 土木学会副会長 阪田憲次
国際委員会 委員 エレン・ワング

フェロー会員 国際委員会 委員兼幹事 河野重行
正会員 国際室長 片山功三

2006年11月17日に、土木学会の海外協定学協会である中国土木水利工程学会(CICHE、台湾)の年次大会において、同学会主催のInternational Roundtable Forumに参加した。ここに、その概要を報告する。

1. CICHE 年次大会



写真-1 CICHE 年次大会会場に入る参加者

2006年(中華民国95年)のCICHE年次大会(および会員代表大会)は、台湾中西部、雲林縣斗六市にある国立雲林科技大学国際会議ホールにおいて同大学の共催のもと開催された(写真-1)。斗六市は、1999年9月21日に発生した集集大地震の震源地南投縣集集から南西に25kmほど離れた位置にある。この地震は台湾では921地震(921 Earthquake)と呼ばれ、台湾で20世紀に発生した最大の地震といわれる。

会場となった国立雲林科技大学へは、首都台北と台湾第二の都市高雄とを結ぶ中山高速公路を3時間半ほど南下しなければならず、バスでの往復7時間の移動は正直いっていささか疲れた。途中、台湾新幹線の下を二度ほどくぐったが、車両の姿を見ることはできず、残念であった。沿道の風情は看板の文字さえ気にしなければ日本のそれと見紛うほどよく似ている。晩秋とはいえ、台湾の11月は平均気温が20℃を超え、斗六市では当日26～7℃で亜熱帯の日差しを感じるほどであった。なお、同大学は、12年前に創設された比較的新しい大学である。

会場となった国立雲林科技大学へは、首都台北と台湾第二の都市高雄とを結ぶ中山高速公路を3時間半ほど南下しなければならず、バスでの往復7時間の移動は正直いっていささか疲れた。途中、台湾新幹線の下を二度ほどくぐったが、車両の姿を見ることはできず、残念であった。沿道の風情は看板の文字さえ気にしなければ日本のそれと見紛うほどよく似ている。晩秋とはいえ、台湾の11月は平均気温が20℃を超え、斗六市では当日26～7℃で亜熱帯の日差しを感じるほどであった。なお、同大学は、12年前に創設された比較的新しい大学である。

2. ウェルカムディナー

年次大会に先立ち、11月16日午後6時半からウェルカムディナーが台北市内ハワードプラザホテルで開催された。海外から参加者はJSCE4名、MACE(モンゴル)9名の計13名であったが、ACECCのJenn-

Chuan Chern 議長、CICHEのYeong-Bin Yang会長、CICHE国際委員会のMing-Teh Wang委員長、CICHE事務局長(秘書長)のKam-Kui Ho氏のほか、JSCE台湾分会のDer-Her Lee分会長の代理で参加された前分会長のYih-Lieh Shih氏など、そうそうたる顔ぶれが揃い、温かい歓迎を受けた。和やかな雰囲気の中で歓談が行われ、最後に相互に記念品の贈呈を行って、終宴となった。

3. 年次大会および会員代表大会

年次大会は17日11時過ぎから、約200人の参加者を前にしてCICHEのYang会長の挨拶で始まり、土木学会から参加した阪田憲次副会長とモンゴル代表のAltantsetseg Bumsan 女史の来賓挨拶の後、両国からの派遣団の紹介が参加者に対して行われた(写真-2)。その後、国道新建工程局長Lin-Bin Chiou氏から台北と宜蘭(Ifan)を結ぶ全長12.9kmの「雪山隧道」(2006年2月開通)の施工概要について講演があった。講演終了後は、日本流に言えば、学会賞授与、委員会報告、会務報告と続き、最後に記念歌を斉唱して、12時半過ぎに閉幕した。われわれは講演終了後に退席し、隣の大講堂の回廊に設けられた台湾新幹線工事記録写真などの展示物を見て回った(写真-3)。



写真-2 阪田副会長の来賓挨拶。左端がCICHE国際委員会のWang委員長

写真-3 台湾新幹線工事に使用されたTBMの模型を前に



昼食は、参加者全員に弁当(台湾では、「便當」という)のサービスがあり、午後の会合は、会員代表大会、研修会、検討会、International Roundtable Forum に分かれて行われた。われわれは International Roundtable Forum (IRF) に参加し、CICHE、MACE の参加者と意見を交換した。

IRF 終了後は、16 時にバスに乗り込み、30 分ほど離れた雲林縣古坑 (Gukeng) にある華山土石流教学園区を訪れた。当地は、集集大地震の翌年の豪雨により発生した土石流の被災地で、現在ではスリット型の砂



写真-4 華山土石流教学園区の石碑。右から 2 番目が Yang 会長、左端がモンゴル代表団団長の Bayarkhuu 氏

防ダムなどが整備されている。最寄の駐車場から徒歩で 15 分ほど山道を登った地点には説明用の案内板なども置かれており、教育の場となっている(写真-4)。

4. International Roundtable Forum

13 時半から 2 時間、IRF が同所にある会議室で行われた(写真-5、6)。テーマは“Globalization in Engineering Accreditation - Educational and Professional”であり、主に高等教育機関における技術者教育プログラムの認定に関するものであった。

Yang 会長の挨拶の後、国立中央大学の Wei-Ling Chiang 教授のいささか早口な司会進行で、4 人のプレゼンターによる発表があった。JSCE 阪田副会長による「Roles and Activities of JSCE in Engineering Education」、MACE の Bumsan 女史による「Civil Engineers in Mongolia」(Ganzorig 会長作成資料の代読)、台湾 IEET (日本の JABEE に相当する組織) 副所長の Mandy Liu 博士による「Accreditation of Engineering Programs in Taiwan」、台湾の APEC Engineer Monitoring Committee の Chia-Yih Chu 氏 (ACECC の副事務局長を兼務) による「APEC Engineer」の発表の後、質疑応答ならびに全体討議を行った。

このフォーラムでは、台湾では米国 ABET の「Engineering Criteria 2000」にならってアウトカムズ評価としていること、認定の有効期間を最長 6 年(日本では 5 年)、5 年間で台湾のすべての大学(450 プログラム)の認定を行う予定であること、すでに 17 機関 47 プログラムの認定を終了し、そのうち、12 プログラム(25%)が土木や環境にかかわるプログラムであるこ

と、審査中の 21 機関 48 プログラムを加えると約 1/5 の認定が今年度中に終了する予定であること、卒業生の約 7 割が修士を希望しており、2007 年度には修士課程の認定を始める予定であることなどの説明があった。

日本からは、土木学会における土木教育の展開状況について、小学校における総合学習支援や JABEE へ

の協力、土木学会認定技術者資格制度と CPD 制度など近年における学会の取組みについて説明を行った。

モンゴルからは同国における土木技術者の現況について紹介があった。台湾の Chu 氏からは APEC エンジニアの現況について、2005 年 6 月時での APEC エンジニア総数 3,860 名のうち、日本が 2,432 名(63%)、台湾が 37 名であり、日本とオーストラリアとの間で 2003 年に相互認証協定が締結されたものの、土木技術者が含まれておらず、登録者数が頭打ちになっていること、ニュージーランドでは APEC エンジニアに同国のチャータードエンジニアなどに申請できるクレジットを与えており、オーストラリアもこれにならう見通しであることなどの説明があった。

高等教育機関における技術者教育プログラムや国際的技術者資格がますます主要国間の関心事となっていることへの認識を新たにした次第である。

5. CICHE の晩宴

17 日の夕刻 18 時から「浪漫之夜」と称して晩宴が、国立雲林科技大学の Tsong-Ming Lin 校長の同席のもと、同大学構内で開催された。海外からの出席者も招待され、同大学学生有志による台湾の楽器を用いた演奏や、くじ引き抽選会もあり、和やかな雰囲気にも包まれた宴であった。

最後になったが、CICHE 秘書長の Ho 氏の献身的な努力に対し敬意を表したい。謝謝。



写真-5 インターナショナル・ラウンドテーブル・フォーラムの会場。当該フォーラムは CPD プログラムに指定されている



写真-6 フォーラム参加者の CPD 記録登録用紙。名前、所属、サインの記入が必要